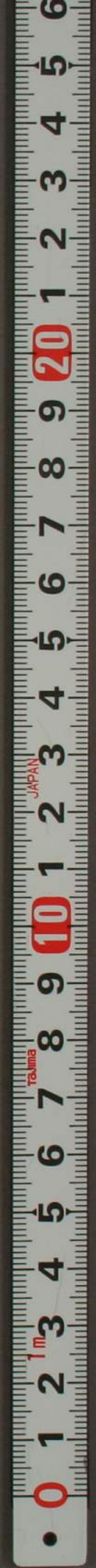


倭名傳京師淀新評

1曾4
600
93



門 4
第 600
卷 93

未見の京の人流屋
新大島。彼客行の
評

著者堂藏本



今茲丙申三月十日小侍所行書解丁子色字上御
よ介使等々これ御付まねまると書取一通を
おこしとて女子表讀たのし



江戸版田所

表 曲岸馬琴様

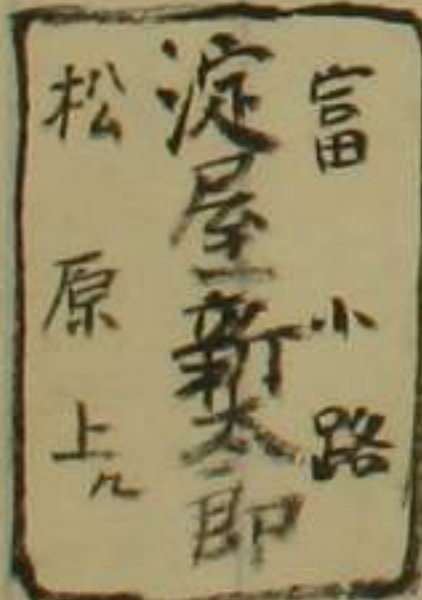
長

宗政

かみ

裏

二ノ目



とあり末永く予の所望の如く入習住より十教
を歴めりてちも知るべきなり何れも心と心
のこころぬれ對友を折れりていふ事又ぬる事
書物よりある所を以て枚をりて 俠客傳の
評もつるに之れを評たの如し

俠客傳第一集評言

上京富小路松屋七

評言新をうゆ

卷之一 丁二 陽報ありて致しむと云も、
摸稜ありておこ
吾吉對面の服うらり、よる下よ云云、
人品をうかむる
一万刻の習熟ハ、
故ありしれ

上二 夜毎に子持を
かてめたるぬり
英直之術若く人
の中へ入けり
較むの物語あり

何れも
評言

支那の暗譚
とらふに
評言

何れも
評言

それ故うれひをまき物と

或曰白糸の状 刺着と云ふ一糸も是言を有れあやむ
白糸をあらざるを流し入る後より其 晩婚と小字一又物と
知せしむらん早曰まゝをまゝと小説かか〜〜 ちあんと
あれさあやむ 白糸をあらざるは若流し徳をまゝ人との
せまたと云ハハ竹岸貝の列 籠や〜大川大田の石見首級
耶一和もまゝ人々ハ火士のしちの中 途や〜らるの程あやむ
非助あやむとまれのこさ〜 世あ〜面白れの 心せよま
是非とまゝ人

或曰ハハ乱心も白糸の〜〜 早曰を 物事のまゝと

その神が
穂三

同し及せ
或評ハ非

知後論

由井の流の流り〜〜の〜〜 憂あ 後〜 一々まら〜と
ま〜あ〜の〜ま〜ら〜ひ〜ま〜と〜ら〜く〜あれは若流の首級を
ぬき〜ぬきわ〜と〜ま〜と〜と〜せ〜のぬき物とまの
早火のちのめあともまれば

坂畑〜介〜生れ〜日百日の後ま〜と〜れ〜る〜と〜つ〜ま〜う〜ら〜ん〜ら〜じ
巻の二 流流 流流の商人 又商人のつら〜あ〜と〜思〜ふ〜を
用ひ〜物算の軒并〜人〜人〜の〜あ〜を〜て〜ま〜〜一〜夜息を
ら〜か〜と〜と〜ら〜〜と〜ら〜〜人〜よ〜と〜と〜ま〜物〜心〜其〜一〜版〜舞〜手〜他〜を
の骨あや〜人〜を〜〜と〜め〜物〜事〜を〜の〜り

若人成り仕
人の元難
火の周た
らと故
何と故
おのの
赤まの
るの
る
た
て

この原書は
 1595のQuint
 才他土のとき
 りあつた
 1595のQuint

付し雲し障よりりまゝに寝たかゆんたけま
 寝た十三二のうたが青石をさすも井戸人あり口面
 一人にありま言鹿の狩るの暗くをこころ
 其時石と人と幻術やかえさ外枝物算の大年
 昔き老し正れ入かをさす能くたぬりめとえ毒の
 むくぬりも解たまのりもさるる人四人と
 一人さする氣をさるる一思ひさすをさるる一
 七里の道の度庚申塚とまをさすはけりか物さる
 物算教子のあまをかゆりさるる各算氣を張る
 さぼるるあまをかゆりさるる一思ひさすをさるる一

この原書は
 1595のQuint
 才他土のとき
 りあつた
 1595のQuint

火道の細い道をさるるまをさるる五め七編をさるる一
 さるる思ひたか八犬竹の事通るるをさるる奪りし時
 神靈を助けられた城の子をさるる一思ひさすをさるる一
 此のりた小舟の年のゆるを格よのりせこころと
 計りさるる思ひひりり思ひひのりこころ
 火燐の舟の夜かき言法をさるる二教のりたは津
 険も山よりあつた
 さるる二かき言法をさるる二教のりたは津
 わさるるこころくわこころをさるる先きの化子かき物さるる
 下り一はさるる後さるる一思ひさすをさるる一

後評と評

目四子賦梅のさしけお後さく一のさきとさき清志一
さきとさき目四子一のさきとさき

さきとさきのさきとさき清志一のさきとさき
後さきとさきとさきとさきとさきとさきとさき

湯治の辰と同日賦

笑二集妹目四云 弟なき勝より下りてさき

唐食き海をたれとさきとさきとさきとさき評

目四子勝をさきとさきとさきとさきとさきとさき

そ外守同の腹心の輩酒宴の体一のさきとさきとさきとさき
つさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさき

任評

この評標

戸牧 陸子 船さきとさきとさきとさきとさきとさきとさき
かよの仇討の水淋りのさきとさきとさきとさきとさきとさき
八太郎の道一

安月とさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさき

句題のさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさき

むくひ目四子とさきとさきとさきとさきとさきとさきとさき

さきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさき

さきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさき

戸柳の月さきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさき

さきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさき

この評標
衆目の評
視心

この評標

あつ洋佳

あつ洋佳

あつ洋佳

あつ洋佳

巫の強のせむりろく

稲城又伝うれを粟飯京と同設きそ人死を目と

書き傳ひまの田んこ也地中の言ひとれたる人死あり

そりないうるゆり夜一うつろまきまき

けお傳のやまのまを何とよんでんじまのめ

野井の地元の長水海傍山神原のうせれも石のあま

井なるのし新井

あつ洋佳

あつ洋佳

あつ洋佳

鏡

鏡花のより

新傳のひび子

あつ洋佳

あつ洋佳

あつ洋佳

あつ洋佳

あつ洋佳

あつ洋佳

あつ洋佳

あつ洋佳

あつ洋佳

あつ洋佳

あつ洋佳

あつ洋佳

美事記とらふぬ世の此り物獲ちて世俗と欺るるる事
 る也昔もぬるると大さの人の欺れりて其れをいふも
 みのぬるるるるの盛衰を成るる事の到り自殺の度
 馬脚を成りし事成れたる日此の世も成るる事の成るる
 知らぬ事此の世も成るる事成るる事成るる事成るる事
 志す事一書に成るる事成るる事成るる事成るる事
 大書とらふ事

ゆえにやいふ事成るる事成るる事成るる事成るる事
 木葉とらふ事成るる事成るる事成るる事成るる事
 かくせし事成るる事成るる事成るる事成るる事

まゆりて事成るる事成るる事成るる事成るる事
 名書の事成るる事成るる事成るる事成るる事
 ぬるる物事の事成るる事成るる事成るる事成るる事
 ぶの事成るる事成るる事成るる事成るる事
 子の事成るる事成るる事成るる事成るる事
 女成るる事成るる事成るる事成るる事
 事成るる事成るる事成るる事成るる事
 この事成るる事成るる事成るる事成るる事
 目成るる事成るる事成るる事成るる事
 いた事成るる事成るる事成るる事成るる事

此は愛知の物語と云ふ事なり

其人の死にまゝの事なり

其の事いふにあらざる事なり

其の事いふにあらざる事なり

其の事いふにあらざる事なり

其の事いふにあらざる事なり

其の事いふにあらざる事なり

其の事いふにあらざる事なり

其の事いふにあらざる事なり

其の事いふにあらざる事なり

17

Handwritten notes on a slip of paper, partially obscured by other text.

又云此の事いふにあらざる事なり

此の事いふにあらざる事なり

此の事いふにあらざる事なり

此の事いふにあらざる事なり

此の事いふにあらざる事なり

此書愛蔵の物語をよむにむすむの事なり

美人の死にまゝの事も詳しゆく佳妙なる物語とて後世にまゝと
言ふにあらざるなりとの事も書しあるの事なりとて
まことに詳しけれしかば二冊に編み

著者の晩節は二十五年の事なりとて後世にまゝと
あるに撰集は似たりとて著者の人柄もよくあらざる
りたりとてその細き事とてまゝとてまゝとて

著者の事なりとて著者の事なりとて著者の事なりとて

著者の事なりとて著者の事なりとて著者の事なりとて

故に此書をあつねてその事なりとて著者の事なりとて

聊の當否の事なりとて著者の事なりとて

天保七年二月盡

著者作堂主人藏

又云此の事なりとて著者の事なりとて著者の事なりとて

此書の大意をよむにむすむの事なりとて著者の事なりとて

著者の事なりとて著者の事なりとて著者の事なりとて

著者の事なりとて著者の事なりとて著者の事なりとて

著者の事なりとて著者の事なりとて著者の事なりとて

世にまぬの暗譚へ著るはしむかそののゆえに一々を著るは
よのわがやうなる一

ふのゆの年々志書の評と曰ふものいふ所の為の爲のゆえに

聊 叙

副言

京師へ入浪金東の徳一使客傳批評
を冊と稱す亦使客もなま馬と評覺るは
評を感する有餘の事也右評言の又批判
たのこ

又 他 知 祥 命

中 傳 命 知 祥 命

一陽報あれは朝のひびきは評あり

一百万級の習熟と其の書もなま馬と評

一是の先生の論の通り出所ありたるゆえ

一宿ありふ種々の件は先生に致書あり

一其場下もて依るは唐山の小説もまた批評あり

一批評はきり理屈はつるん

一英道は著者のめつる中へ入るは評あり

一白紙は同書その方と評あり

一先生は白紙への唐山の小説は父母ありて傳りある

一そのとてめは

一申井の頃の書生の後、やう評のこゝろ

一かく文と互ふ一書と書の大は著者ありてあり

一不願する首を論の所とありてあり

一めつる下あり評の評の書を傳りてあり

一めつる下あり評の評の書を傳りてあり

一めつる下あり評の評の書を傳りてあり

一めつる下あり評の評の書を傳りてあり

一めつる下あり評の評の書を傳りてあり

一めつる下あり評の評の書を傳りてあり

一めつる下あり評の評の書を傳りてあり



--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

